

「JR三河大塚駅前の辻」  
(大塚町端城)



現在の景色

大塚の地名の由来は、丸山古墳(5世紀末)、笹子古墳(6世紀初)の2基の前方後円墳が代表するように、古墳の多いことから「大塚」と呼ばれたようです。大塚小学校のグラウンドから縄文時代の土器が発掘されるなど、大変古くから人が住んでいた土地です。また、鎌倉時代には、砥神山の大塚側に三河七御堂の一つである全福寺と12の僧院が建立され、御堂山一帯が栄えたと言われています。

大塚は、15世紀中頃には萩原氏、ついで岩瀬氏に支配され、江戸時代は約1,300石の代官支配地でした。1871年(明治4年)ごろには、328戸1,445人の半農半漁の村でしたが、1907年(明治40年)に星越海岸道路が完成し、三谷・蒲郡との交流が開け、ミカン栽培、ノリ養殖、織物という新たな産業が加わり、村は発展しました。

この絵はJR三河大塚駅前の辻を中央にして西から東を向いて描きました。絵の左奥に1953年(昭和28年)海水浴のための季節駅(7~9月)として開業し、後に普通駅に昇格したJR三河大塚駅があります。絵の中央約300m先には、岩瀬氏が築城した中島城跡や郵便局、大塚小学校、大塚村役場跡などがあり、昭和の時代まで中心地となっていました。右手前には今の大塚の中心となっている大塚公民館が、その上には、岩ばかりの土地が開発されて見晴らしの良い住宅地となった産子山があります。さらに絵の右に隠れている坂を下ると、2000年(平成12年)に大塚海岸を埋め立て完成した「ラグーナ蒲郡」があり、開業以来大変なにぎわいを見せています。



樹木医・技術士(建設部門・環境部門) 原野 幹 義

「目にモミジ <sup>ホトトギス</sup>花時鳥草 秋サンマ・ホトトギス」

鷺草<sup>さぎ</sup>という蘭の仲間の白い花があります。空を舞う優雅な白鷺の姿そのもので、どうしてこんな形の花が咲くのかと、自然の造形の妙に感嘆し、一目見てその名前に納得させられます。しかし、初めてホトトギスの花を見たとき、どこが似ているのかと不思議に思ったものです。

最近では、見ることや声を聞くこともないホトトギスですが、<sup>ホトトギス</sup>図鑑で調べてみると、不如帰は羽の近くに横縞があり、その縞が胸の辺りでは、まだら模様になっています。その模様が似ているとこのことで花にも同じ名が付けられたようです。ヒヨウ柄やダルメシアンなどの模様が知られていなかった時代とはいえ、わずかな体の一部の模様から名付けられるとは、よほど身近で生活や文化との関わりが強かったのでしょう。

私自身は、一見したときドラゴンボールの「セル」の模様が真っ先に思い浮かびました。実際はマダラカミキリムシのイメージからきているのでしょうか…。

肉眼では見にくいのですが、雌しべは3つに分かれ、その各々の先端がカブトムシの角のように2つに分かれています。そして子持ち昆布のように小さな薄黄色の玉(腺毛状突起)が着いています。本当に不思議ですね。



目次 Contents

裁判員に選ばれるまで	3
指定ごみ袋制とレジ袋の有料化が始まります	4-5
赤ちゃんの全戸訪問が始まります	6
後期高齢者医療制度が改善されました	7
MYスクール・図書館だより	8
まちの達人・読む水族館	9
遊びにおいでよ児童館へ	10
健康カレンダー	11
市民相談	12
お知らせ	13-21
クイズまちがいさがし	22
ふれあい宅配便	23
こどもミュージアム	24
がまごおりを描く	24